

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	0 理念・目的
第三者評価記入欄		
1		<p>・最終年度に当たり、事務局の設定したPDCAサイクルに従って、各担当部局は、それぞれ必要な改善を図った上で、きちんと自己評価を行っていることが読み取れ、学内における自己点検評価が着実に根付いてきたことが伺われます。</p>
2		<p>・時代の変化や諸状況の変化に伴って、理念・目的の再検証をすることや、理念・目的の周知方法などについて、多くの部局で体制整備が整ってきたことは評価できます。</p>
3		<p>・大学全体の理念・目的を、各部局の理念・目的の中に、どのように取り入れ、生かすのかについての意識は大切です。</p>
4		<p>・進捗状況について正直にABCD評価することには好感が持てますが、5年間を通してD評価をつけた目標については、今後の取り組みが期待されます。</p>
5		<p>・教員・学生に対する理念・目的の周知について、いろいろな努力を行ってきたことは評価できます。ただ、その結果としての認知度調査が、全体的に不十分なようです。全学的にどう取り組むのか、その方法の開発、企画を行うことが望まれます。</p>

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	1 キリスト教主義教育
	第三者評価記入欄	
1	・計画としては、おおむね着実な進行が見られますが、具体的な参加者の拡大に対する奨励策や方策に関して、実効性に乏しいし、その成果が上がっていないようです。この点について積極的な対応が望ましいと思われれます。	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	2 人権教育・人権問題
第三者評価記入欄		
1	<p>・人権教育の基本方針の明確化のための定例会議の実施や、その発表、ホームページへの掲載等、所期の目的を達成しており順調な進展がみられます。</p> <p>また、新入生を対象としたパンフレットの配布も積極的に行われており学生への働きかけは評価できます。ただし、職員の講演会への参加が少ない点、ある程度強制力のある具体的な対策を検討すべきことが望ましいと思われまます。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	3 ボランティア活動・教育
	第三者評価記入欄	
1	<p>・ボランティア活動の理解や団体との話し合いなど進展がみられるようです。なお、「ボランティア関連科目」は具体的にはどのような科目が提示されていますか。また、「ヒューマン・サービスセンター」の発展的改組の具体的な計画はどのようになっていますか。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	4 教育研究組織
第三者評価記入欄		
1	<p>・全体として、当初考えられた目標に向かって着実に進展していると思われます。当初の目標を廃止することも、組織の改廃など状況の変化に対応すれば、有り得ることです。</p>	
2	<p>・PDCAサイクルについては、概ね順調に回っていると思われ、特に、将来に向かっての方向性の記述も見られます。</p>	
3	<p>・教育研究組織については、必ずしも頻繁に見直すものではありませんが、多くの部局で、見直しのための組織体制を確保し、必要に応じて議論できるようになっていることは、適切と思われます。</p>	
4	<p>・部局によって目標が異なるのは当然ではありますが、その部局が直接当面する課題に偏る傾向があります。目標を設定する場合の観点として、シートに示された「小項目」や「要素」、例えば、「小項目」の定期的検証などを、もう少し重く考えても良いのではないかと思います。</p>	
5	<p>・他の部局の取り組みについて、自己点検・評価報告書を読んで自らの取り組みへの参考にすることが期待されます。</p>	
6	<p>・5年間、D評価をつけた場合は、目標の設定そのものの再検討も望まれます。</p>	
7	<p>・人事の透明化を進めている部局がありますが、他の部局でも進めることが期待されます。</p>	
8	<p>・教育研究組織の見直しに当たっては、外部の意見を聞くことも有益だと考えられます。</p>	
9	<p>・他学部との共同研究体制を構築しようとする姿勢は評価できます。</p>	
10	<p>・今後の取組みについて、具体的イメージが湧いてくるような記述が望まれます。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	5 学生の受け入れ
第三者評価記入欄		
1	<p>・学部入試は、最近5年間をみると全般的に安定した入学者数の確保がなされており、評価ができません。但し、志願者数が逡減傾向にある点には留意すべきです。</p>	
2	<p>・一般入試での入学者数が全体の入学者の4割を切っている学部がありますが（人間福祉、教育、国際）、独自の意図をもって実施されているのでしょうか、検証結果があるのであれば示してください。</p>	
3	<p>・2014年から開始されたグローバル入試の結果についての考察があれば、示してください。</p>	
4	<p>・全研究科入試をみると志願者数は減少しており、2014年には後期課程に加えて前期課程の倍率も0.9と1を切っています。その結果、収容定員に対する在籍学生数比率が前期課程70.2%、後期課程65.4%にまで低下しています。定員削減や一部の大学院生に対する経済的支援など、抜本的な対策の検討が求められます。</p>	
5	<p>・法学、経済学、商学、総合政策は研究科の収容定員の絶対数が多く影響が大きいので、最近の就職状況の好転の影響を受けやすい分野であることも考慮しつつも、今後の対策を十分、検討することが求められます。</p>	
6	<p>・司法研究科、経営戦略研究科は2012年から志願者数の減少が始まっており、2013年、2014年と減少傾向が強まっています。その結果、収容定員に対する在籍学生数比率がそれぞれ43.2%、59.8%にまで低下しており、対策が求められます。</p>	
7	<p>・編入学定員に対する編入学生比率が2014年に67.3%に大きく減少して7割を切っています。背景にある要因、現象の検討が求められます。</p>	
8	<p>・退学者数は、2010年、2011年、2012年の推移をみると、概ね水準は変わっていませんが、増加傾向にある学部が4学部（法、経済、総合政策、国際）ある点については、何か問題点が生じていないかなどに留意すべきです。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	6.1 教育目標、学位授与方針、 教育課程の編成・実施方針
第三者評価記入欄		
1		<p>・文学部：これは、全学について該当することですが、各目標の達成度報告欄のDo-Check-Actionのうち、Check欄の記載が必ずしも適切でない場合があります。たとえば、文学部の目標4は、「カリキュラム委員会の機能と職責を改定する」とされており、Check欄では「2011年度に『カリキュラム委員会の組織と役割』を明文化し、2012年度から施行した」と記述されています。明文化は一步前進ではありますが、実際にどのように活動して、どのような成果があり、どのような問題点が発見されたのかというプロセスは不明です。目標を「改定する」という点に置くと、「明文化・公表がなされた」という段階で「A」評価になりますが、実際には改善に向けた取組の中で問題や成果が見えてくるものですから、今後は目標の設定のありかたにも配慮することが望まれます。</p>
2		<p>・社会学部：目標4 Check欄に「入試関連業務から、受験生、高校教員（進路担当）に伝わっていることが窺える」と記されていますが、「入試関連業務から」という表現では、エビデンスとして十分ではありません。また、2009-2011年度までは「B」評価、2012-13年度は「A」評価になっていますので、経年的変化の内容や、受験生たちにどの程度伝わっているのか、さらに発展させる可能性はないのか、などについて、より具体的な記述が望まれます。</p>
3		<p>・経済学部： 「KG経済学士力」を掲げて、数値化した目標を設定していることは評価できます。しかしながら、目標の1、3、4の進捗状況Check欄にはすべて（結果や周知状況の）「測定はできていない」という趣旨の記述があり、目標3、4では、それにもかかわらず、「A」評価になっています。成果がきちんと検証され、問題点まで洗い出されてはじめて次の改善段階に進めることを考えて、より緻密な検証と、整合性のある評価が望まれます。</p>
4		<p>・経済学研究科：目標4 「英語による授業科目を増やす」という目標ですが、5年間一貫して「D」評価になっています。しかしながら、各学期1～2科目の開講がなされ、「入学者及び教員の英語能力との兼ね合いもあり」という認識が得られているので、全く何も対応がなされていないわけではありません。「英語による授業」を提供しさえすれば、学生の英語理解力や運用能力が向上するわけではないので、目標の設定そのものを見直す契機を得た、というプラス評価も可能です。経年的プロセスの記述がないので、わかりにくいところもありますが、検証をきちんとし、今後の改善に役立てることが望まれます。</p>
5		<p>・理工学部： 「目標」は4点とも「明文化する」や「公表する」とされているので、実現した時点で「A」評価となり、自己評価に矛盾はありません。ただ、今後重要なのは、それらに即した教育が実施され、所期の成果が上がることなので、検証と改善の取り組みを継続させることが望まれます。</p>
6		<p>・総合政策研究科： 目標2、3は、2009年度から2012年度まではすべて「A」評価ですが、2013年度はいずれも「B」になっています。報告の記述では、経年的な変化が十分に説明されていないので、最終年度に「B」になった根拠がわかりにくいものになっています。検証結果とそれへの対応をわかりやすく説明することが望まれます。</p>
7		<p>・人間福祉学部/人間福祉研究科： 記述と達成度の評定が適切に対応しています。課題がある場合は「B」「C」等の率直な評価になっており、誠実な検証態度が評価できます。</p>

<6.1教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針>

8	<p>・教育学部：目標2 目標2は、「A」評価になっていますが、「積み残された課題がある」と明記されています。整合性に問題はないでしょうか。また、今後の改善を進めるために、この「課題」についても説明が必要ではないでしょうか。</p>
9	<p>・経営戦略研究科後期課程：目標1、2、3 目標1、2、3について、いずれも「適切に伝達できている」として、「A」評価になっていますが、どのような方法で「適切に伝達できている」ことを調査されたのでしょうか。学生の認知度・理解度を示す検証データが望まれます。</p>

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	6.2 教育課程・教育内容
第三者評価記入欄		
1	<p>・大学全体（全学的な視点）： 目標・指標の設定、特別プログラム等を組み入れての目標再設定など、きめ細かな対応がなされている点は評価できます。検証体制の構築が今後の課題でしょう。</p>	
2	<p>・神学部： カリキュラム・ポリシーが適切に運用され、改善につながっていることは評価できます。</p>	
3	<p>・文学部：目標 5 目標 5「文学部履修心得」の改善について、「100頁以上削減し、わかりやすいものにした」として「A」評価になっていますが、ページ数の削減とわかりやすさとの関係が不明です。エビデンスとしての検証データが望まれるところです。</p>	
4	<p>・文学研究科： 目標 1、2 はまだ成果が確認できないので、「A」評価には届かないように思われます。目標 5 も「A」ですが、提示されているデータで「活発化した」と判断できるのか、検証が望まれます。</p>	
5	<p>・経済学部： 進捗状況についての自己評価はおおむね妥当と思われます。 「6-1」の文学部の項でも類似の指摘をしましたが、取組の検証体制が未整備で、Check、Action欄が指示に従った内容で書かれていないことは今後の課題となるでしょう。</p>	
6	<p>・経済学研究科：目標 3 目標 3 は、「目標」に複数のテーマを入れて設定されており、それに応じて「指標」の内容も複数になっています。報告によれば、「ワークショップの単位化」は実現しているもので、適切な目標設定をしていれば、この項目は「A」評価になったのではないかと思います。今後は検証しやすい目標・指標の設定が望まれます。</p>	
7	<p>・理工学研究科：目標 2 他部局でも散見されますが、Check欄の記述に5年間にわたる取組のプロセスが表れておらず、2013年度分のみが記述されている報告が少なくありません。ここでは「目標 2」について、各年度ごとに「C」「B」等、きめ細かな自己評価をしてきて、最終年度に「A」に達しているのに、改善プロセスとして記述すべき内容が十分にあるのではないかと、思われます。実践があるのに、記録や検証が追い付いていないケースで、5年間の改善努力が惜しまれます。</p>	
8	<p>・総合政策学部：目標 2 目標 2 について、「ボランティア・ティーチャ制度」が中止になったために2012年度の「A」評価から、2013年度は「D」評価になっています。このこと自体にはやむを得ない面がありますが、活動していた4年間についての総括や検証はどこかでなされているのでしょうか。「ボランティア・ティーチャ制度」という取組を通じて、学生や教職員が学んだことがなんらかの形で継承されることが望まれます。4年間の活動実績があるのですから、その経過や成果については、本報告書にも簡潔に記述されていればよかった、と惜しまれます。</p>	
9	<p>・国際学部： 明確で具体的な「目標」「指標」「評価基準」設定によって、着々と改善が進んでいることは高く評価できます。</p>	

10	<p>・経営戦略研究科後期課程：目標2 目標2は「A」評価ですが、「意見交換会は年1回程度の開催に留まる」とされているので、今後はより体系的な取組が望まれます。</p>
----	--

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	6.3 教育方法
第三者評価記入欄		
1	<ul style="list-style-type: none"> ・大学全体：(学部) 	Do、Check、Action それぞれの項目が適切に記述されていて評価できます。また、それにより、着実に成果の上がっている状況が確認できます。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・神学研究科： 	報告書の記述について、年度ごとの取組をきちんと踏まえたものになっており、丁寧でわかりやすい報告です。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・文学部：目標3 	「目標3」について、アクセス数の把握が記述的に困難との理由で「D」評価になっていますが、目標・指標の設定を再考する可能性はなかったのでしょうか。学部としての努力で「B」や「A」の手ごたえのある評定を出していくことにも意味があるのではないかと、思われます。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・法学部： 	意欲的に10項目の目標を設定し、努力がなされたことは評価できます。ただ、将来の改善に向けてもっとも重要な「Check」欄の記述がおしなべて簡略すぎるように見えます。プロセスと結果の分析をきめ細かく行うことが望まれます。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・経済学部： 	(6-2の経済学研究科への指摘と共通しますが)一つの「目標」に複数のテーマが盛り込まれているために、Do、Check欄の記述も「指標」と若干のずれを生じています。「指標」は「履修者数」「成果報告数」などの数値データをよりどころにするとしていますが、報告書の記述にはそのデータがありません。「目標」「指標」の設定と、報告との整合性に留意することが望まれます。
6	<ul style="list-style-type: none"> ・商学部： 	7項目の「目標」を設定して意欲的に改善に取り組んだことは評価できます。ただ、まだ十分な検証や成果の確認がされていない項目が多く、Check欄の記述のしかたには、今後なお工夫が望まれます。
7	<ul style="list-style-type: none"> ・商学研究科：目標1 	目標1について、Check欄で「効果を測定することはできないが」と書かれていますが、「指標」の適切性について再検討の余地があるのではないのでしょうか。「目標」「指標」を設定する段階から検証システムを念頭において設計することが望まれます。
8	<ul style="list-style-type: none"> ・総合政策研究科： 	独自の工夫のある取組がなされて、相応の成果が上がっていることが確認でき、評価できます。
9	<ul style="list-style-type: none"> ・人間福祉研究科：目標2、目標4 	目標2について、Check欄の「充実が図られつつある」という判断と「B」評価、ならびにAction欄の「これ以上は見直さない」という記述の3点が内容的に整合していません。また、「指導体制」が、学生への教育的観点よりも、「教員組織」の問題として考えられているようで、本テーマ「教育方法」を逸脱しているように見受けられます。 目標4について「指標」は「投稿数および学会発表数」となっていますが、2009年度から2013年度までの数値データの変化には言及されていません。「A」評価の根拠の明示が望まれます。

10	<p>・教育学部： 全体として率直な自己点検・評価がなされて、進捗状況がわかりやすい記述になっており、報告書のありかたとして評価できます。</p>
11	<p>・教育学研究科：目標4 「目標4」について、Check欄では「指導教員の数を増やし、より専門性を生かした指導ができる体制づくりをした」と報告されていますが、それではなぜ「C」評価なのでしょう。記述と評価とが整合するような説明が望まれます。</p>
12	<p>・国際学部：目標4 「目標4」について Do欄に「各教員の成績評価も安定してきた」という記述がありますが、これはなんらかの検証を行ったからこそその結論ではないのでしょうか。Check欄の「成績評価については大きな問題はなく、特に変更する点はなかった」も、何らかの検証の結果ととれる文章です。「D」評価と整合していないように思われます。また、経年的な変化プロセスのわかる記述が望まれます。</p>
13	<p>・言語コミュニケーション文化研究科： 「目標」と「報告」の内容が整合してわかりやすく、5年間の変化について目配りの利いた判断になっており、評価できます。</p>

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	6.4 成果
第三者評価記入欄		
1		<p>・大学全体（研究科）： 「目標」「指標」の1、2は、「6-3 教育方法」に移す方が適切ではないでしょうか。</p>
2		<p>・神学研究科： 目標1の「Action」前半の記述は、「6-3 教育方法」に関するものになっています。 目標1、2とも、経年的変化を考慮した具体的な自己点検・評価になっており、改善への姿勢が認められます。</p>
3		<p>・文学部： 「6-4 成果」は、主として「6-1」で掲げた教育目標がどの程度実現できたかを問うものです。 「目標」「指標」の設定は不適切ではありませんが、報告は、「目標2」については「教育方法」、「目標3」については「学生支援」を内容としています。「目標」「指標」「進捗状況報告書」の内容を整合させることが望まれます。</p>
4		<p>・文学研究科： 「目標」1、2については、2013年度のデータのみ提示されていますが、2009年度からの経年的な改善状況についての記述が望まれます。</p>
5		<p>・社会学部：目標1、目標2 「目標1」のCheck欄で、「キーワード集」作成・配布・使用についての検証結果の記述が望まれます。 「目標2」については、「到達度の検証」をする具体的な指標やシステムについて、改善のプロセスがわかるような記述が望まれます。</p>
6		<p>・社会学研究科：目標1、目標1、2 「目標1」について、「学生による授業評価」指標の改善は「6-3 教育方法」の内容です。また、「目標1、2」とも、評価がそれぞれ「A→B」「B→A」に変化しているので、経年的な改善プロセスについての記述が望まれます。</p>
7		<p>・法学部：目標1 「目標1」について、IRを試行的に導入したとのことなので、今後の展開が期待されます。</p>
8		<p>・法学研究科： 設定された「目標」は、「6-3 教育方法」の項目に対応するものが多いように見受けられます。 「6-4 成果」は、「6-1」の教育目標に沿った成果が上がっているかを問うものですので、「目標」「指標」の再検討が望まれます。</p>
9		<p>・経済学部： 「KG経済学士力」という教育目標を設定しているので、「6-4 成果」では、その学士力をどの程度身につけさせることができたか、という視点から、GPAやERE、ゼミナール活動などを「KG経済学士力」と有機的に関連付けた記述が望まれます。この意味で「目標」「指標」の再検討も望まれます。</p>
10		<p>・商学研究科：目標1、目標2 「目標1」は「目標」「指標」に即した的確な記述でわかりやすく、評価できます。「目標2」は、「学生支援」または「教育方法」の項目に対応していますが、記述が経年変化を踏まえて適切になされている点は評価できます。</p>

11	<p>・理工学研究科： 「目標 1、2」とも、2009年度からの経年的な改善状況を踏まえた記述が望めます。全体として、「6-1」で設定した「教育目標に沿った成果が上がっているか」という視点に立った記述が望めます。</p>
12	<p>・総合政策研究科： 5つの「目標」「指標」を設定して改善に取り組んでいる姿勢は評価できます。 「目標 1、2」は、「教育方法」または「学生支援」の項目に対応するのではないのでしょうか。 「目標」の1で、「研究水準が上がった」また4で、「成果を上げている」と判断した根拠はなんのでしょうか。検証プロセスを明確にした記述が望めます。</p>
13	<p>・人間福祉学部：目標 3、4 「目標 3、4」について、改善状況の経年的な変化について記述することが望めます。</p>
14	<p>・言語コミュニケーション文化研究科：目標 3 「目標 3」の「進路調査」はすぐれた取組です。回収率が高いということは、それだけ信頼性のあるデータが得られるということですから、今後の分析・活用が期待されます。 改善の進捗状況にかかわる経年的な変化について記述があれば、より充実した報告になったでしょう。</p>
15	<p>・経営戦略研究科後期課程：目標 3 「目標 3」について 学位授与が順調に行われていることは評価できます。 「教育目標に沿った成果があがっているか」という視点が見えにくいので、「6-1」で設定した教育目標と、本「6-4 成果」とを有機的に関連付けた記述が望めます。</p>

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	7 国際交流
第三者評価記入欄		
1	<p>・全体として国際交流はかなりの進展を見ており、おおむね実現に向かってしていると評価できます。より積極的な展開のためには、特別な予算を配布するなり大学の財政的な援助が望まれます。</p>	
2	<p>・この分野は、例えば理工学部と商学部のように部局によってその関与の度合いや積極性に差異がみられるのはやむを得ないところですが、その意味で各部局の評価の基準や判断の点で整合性の取れていないところが見られます。それらを整理したうえで、本学の大きな柱のひとつとして将来に向かって育てていくことが期待されます。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	8 学生支援
第三者評価記入欄		
1	<p>・学生支援相談室の利用者数が2013年に3,543人と大きく増加しています。最近では、評価にも言及されている発達障がい、精神障がいの学生の増加など、学生相談が多様化して対応が難しくなっていると思われまますので、より一層の対応の充実が求められます。</p>	
2	<p>・体育館の開館時間の延長は、学生活動への大きな支援になったと考えられます。なお、それ以外のスポーツ等の学生活動を支援する対策がもっとあるように思いますので、それについても検討が進められることが期待されます。(目標設定の追加など)</p>	
3	<p>・奨学金制度の拡充が着実に進んでいることが指標からみえており、評価することができます。今後は実際の支給等を適切に行う運用が求められます。(成績基準を満たさない学生を減らすなど)</p>	
4	<p>・学生の就職支援活動は年々、充実してきていることが各指標の推移からわかります。但し、1～2年生向け体験型実習プログラムの参加者数、インターンシップ派遣学生数が2013年に減少に転じているのには留意する必要があります。</p>	
5	<p>・文系の大学院生の就職率の向上は入学者数の確保につながるとみられるため、文系大学院生の就職支援をより強化することを検討していただければと思います。インターンシップ、プログラムなどは大学院生のみ限定したもの以外も含めて、もう少し目標を高く設定することが可能と思われます。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	9 教育研究等環境
第三者評価記入欄		
1	<p>・各部局で設定した目標について、それを達成すべくいろいろな努力がなされてきており、PDC Aサイクルの考え方が、大学全体に着実に浸透してきています。</p>	
2	<p>・教育研究等環境の整備の基本的事項を正面から捉えて、目標の設定を行なっている部局は、全体の整備進捗状況がよく理解できます。一方、比較的細かい事柄についての目標設定を行なっている場合には、達成度は高くても、部局全体としての整備進捗状況が、十分に伝わってきませんでした。</p>	
3	<p>・外部資金の導入については、目標に掲げている部局は研究費を増やす意欲が伺われます。目標に対する進捗状況の評価は、甘い評価も見受けられますが、そもそも目標に掲げていない場合も見られます。</p>	
4	<p>・各部局に共通して、「研究専念時間の確保」については、目標の達成に苦労が伺われます。学生のための講義にかける時間は減らすわけにはいきませんが、カリキュラム体系の見直しをする部局があります。会議にかける時間を減らす方法として、報告事項はメールによることにした部局もあります。先行部局の例を参考とするなど、研究時間を確保する工夫が期待されます。</p>	
5	<p>・財政に深く関係するため、財政の手当がなされた事項、例えば、LAについては、多くの部局で目標の達成が進んでいます。大学全体として、学生の学習環境の整備に取り組んできたことは評価できます。</p>	
6	<p>・学生との対話や各種のアンケート調査などにより、関係者の声を取り上げるプロセスをとっていることは、高く評価できます。</p>	
7	<p>・当初の目標が達成できず、5年間、D評価とするケースがあります。目標を変更する方法もありますが、何らかの方法により目標に近づくことができれば、評価を上げて良いと思われます。</p>	
8	<p>・「施設設備計画の立案」を目標とするのであれば、5年間の間には「立案」に向かう努力が求められます。</p>	
9	<p>・具体性がない表現や、なぜB評価なのか、なぜC評価がB評価に上がったのか等の説明が不十分な記述がありました。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	10 社会連携・社会貢献
第三者評価記入欄		
1	<p>・この分野は、研究推進社会連携機構や梅田キャンパスの社会人講座など組織がうまく機能して着実に成果が上がっており、目標の実現が達成され高く評価できます。すでに示唆されているかもしれませんが、大学の外部との連携活動など社会貢献として外部に広く広報もおこなってはどうか。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	11教員・教員組織
第三者評価記入欄		
1	<p>・教員の活動の評価については、その前提となるデータ（例えば学生の授業評価、学生の満足度等の意識調査の結果、研究活動の実態等）の整備や開示を進めることが重要です。「14 内部質評価」では、研究業績データベースへの入力が進んでいないとの記述もあり、一層のデータ整備を進めることが求められます。</p>	
2	<p>・専任教員1人あたりの学生数（ST比）については、全学レベルでみると最近5年間でほぼ水準に変化はありません。学部によっては、ST比が50人を超えているところ（社会、法、経済、商）もあり、学生の満足度などとの関連も含め、一定の総括がなされることが期待されます。</p>	
3	<p>・教員組織の検証については、ここ数年の教員の世代交代を背景に、教員の適切な年齢構成の維持などの目標をもって各学部で人事、採用が進められていると推察されます。今後も各学部の状況に応じた適切な運用を進めることが期待されます。</p>	
4	<p>・FD活動が研修会などを中心に各学部で意識的に取り組まれているとみられます。但し、全学レベルでは触れられていた現行のLMSシステムやその他のICTを活用した新しい授業方法への取り組みなどに関する言及をされている学部・研究科はありませんでした。今後はそういった活動に明示的に取り組み、評価・検証を行うことが期待されます。</p>	
5	<p>・2014年6月に学校教育法の改正が国会で可決されましたが（2015年4月から施行される予定）、その改正においては教授会の役割についての変更などが盛り込まれています。この学校教育法の改正を受けて、教員組織のあり方をめぐる検討を今後、進めていくことが求められると思われま</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	12.1 管理運営・財務 (管理運営)
第三者評価記入欄		
1	<p>・新中期計画の実行状況の記述が分かりにくいです。新基本構想の全施策74施策のうち、完了したものが9施策、実施計画として進行しているものが59施策、それ以外が6施策とすると、その中で新基本構想の素案から新中期計画の施策に具体化できたのが6施策という意味でしょうか。</p>	
2	<p>・全体として、新中期計画の進捗状況がどの程度進んでいると評価しているのかを、分かりやすいように記述してください。</p>	
3	<p>・新職員人事制度の導入、職員の業務分析による適正人事配置、機構化による事務組織の大きくくり化、研修制度の見直しなど、事務組織の改革が着実に進められている点は評価できます。今後は併せて、運用の状況の確認を進めるために、職員の意識調査など職員の視点からの検証を進めることが期待されます。</p>	
4	<p>・教員側の新しいガバナンス体制・マネジメント体制が2013年より構築されている点は評価できます。この新しい体制は執行の一元化という意義がある一方で、牽制機能が適正に作用するかなどの課題もあるとみられます。今後は、その成果と課題の検証を具体的に進めることが期待されます。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	12.2 管理運営・財務(財務)
第三者評価記入欄		
1	<p>・消費税引き上げもあり厳しい財政見通しですが、外部資金の確保・寄付金収入の増収について厳しい経済情勢においてどのような戦略を立てるかは重要ではないでしょうか。</p>	
2	<p>・事業評価の本格導入についての合意が得られていないとのことですが、すべてに導入するのではなく、できるところから試行的にでも導入をすることはできないでしょうか。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	13 危機管理
第三者評価記入欄		
1	<p>・危機管理基本方針については今後の策定予定とのことですが、現在の進捗状況がわからないので目標に対する評価ができません。</p>	
2	<p>・理工学部における取り組みは評価ができます。上ヶ原・聖和についてどのように避難計画を策定・周知するのかについて、お伺いしたいと思います。特に上ヶ原は学生数も多いので工夫が必要かと思われます。</p>	
3	<p>・感染症については新型インフルエンザだけではないと思われるため、幅広い感染症対応について、関係省庁や病院と連携して引き続き取り組みが期待されます。</p>	

2014年度 自己点検・評価 学内第三者評価シート(評価項目別)

	テーマ	14 内部質保証
第三者評価記入欄		
1	<p>・院長総括の反映が不十分とのことですが、院長総括を計画に盛り込むことが難しいのであれば、総括に対する対応を個別に指示し、評価室がアドバイス機能を果たすなど、計画への反映を働きかけてはどうでしょうか。</p>	
2	<p>・P D C Aサイクルはある程度構築されているものの、明確に進捗状況が改善につながっていることが見えにくい項目もあります。今後、継続的にP D C Aや見える化の仕組みの検証も求められます。</p>	
3	<p>・認証評価での指摘を受けた努力課題について、真摯な対応が求められます。</p>	
4	<p>・自己点検・評価の取り組み、そのための基礎データの収集・整備については、その継続的な取り組みに対して、特に高く評価したいと思います。</p>	
5	<p>・自己点検・評価について、さらに一段上の質の取り組みを進めていくことが期待されます。それには、2013年度の機関別認証評価を一つの梃子に、3年後の改善報告に向けた活動をデザインしていくことが必要ではないかと思われます。毎年の短期的な活動見直しの取り組みに中期の改善の活動を組み合わせることが有効と考えられます。</p>	
6	<p>・評価のための基礎データの中で、特に研究成果の入力率が低い点には懸念を表明します。大学全体の競争力の向上、それを見える化する上で、研究業績データベースは一つの肝になると考えられるからです。</p>	